



リフト（仮）



花迫カルピン

††

前にも同じようなことがありました。僕は当時高校一年生。入学して間もない5月、僕は初めて1人の女性に惚れられました。その女性はクラスでも評判が高く、また違うクラスにまでも話題に上る様な人気の女性でした。僕自身、少しその女性のことが気になっている所があり、クラスメイトの伝手でその事実を知った時、僕は中学時代の友人に電話をし、嬉しさのあまり街中を駆け回ったほどです。端から見たらとんだキ○ガイ者と思われたことでしょう。

その女性の名前は金本ゆいと言います。体育会系で、バレーボール部に入っていました。1年の主力セッターでした。身長は160cm前後くらいで、女性の中では少し背が高いくらい。元気が良くて、やんちゃ。男友達が多くて、悪戯好きと言え、ある程度想像は出来るのではないのでしょうか。髪型はストレートのセミロング。目はくりくりしていて円ら、スタイルはスポーツマンの割に華奢でとても可愛らしい女性でした。

金本さんは確かに僕に気があるらしく、いつも僕に笑いながらちょっとした悪戯を仕掛けてくるのでした。その度に僕はまんざらでもない、といった気持ちで同じように悪戯をし返すのでした。運命か偶然か、移動教室を含めたあらゆる授業で金本さんは僕の隣の席にいました。毎日二人だけの世界に入り、授業はあっという間に終わっていきました。

さて、6月になり僕は周りのとある脅威の存在を知る事になります。中学時代からの友人が他クラスの男の子を連れて何やら教室の前に来て、金本さんと話を始めました。その時、僕は金本さんの隣にいましたので、当然その二人の会話を聞く事が出来たのです。会話自体は大した事なかったのですが、その友人の連れて来た男の子があやしかったのです。あやしいというのは、その男の子はどうやら金本さんに惚れてるらしい匂いがしたのでした。根拠のない直感に過ぎないのですが、その後その男の子を連れて来た友人から「今日友人が話し掛けてた女の子知ってる？あいつあの子の事好きなんだって。」というメールが届き、それが事実であることを知ったのでした。僕は不安に襲われました。実は周囲から、早く告白してしまえといったような話はしょっちゅう言われて来たのです。しかし、どうしてもその一歩が踏み出せずに一ヶ月が経ってしまったわけです。ところが、他にも金本さんを狙っている男がいると知って、居ても立ってもいられなくなり、その日のうちに僕は金本さんに告白をしました。

当然ですが、その告白は成功しました。僕の初めての彼女です。でも、僕は知っておくべきでした。叶わない方がいい恋愛もあると。金本さんは前にも書いた通り、根っからの体育会系でした。我が校の女子バレーボール部の顧問の金剛地先生はスパルタ指導派で、バレーボール部員にはほとんどプライベートの時間など用意されませんでした。朝起きて、練習に出る。授業を受けて、放課後体育館で猛特訓。その後、外の施設まで行き、夜まで練習は続けました。かくいう僕は軽音楽部で1バンド週1回の放課後練習があるのみで、基本的に暇を持て余している側の人間でした。一緒に登下校も出来ず、校内では僕と金本さんが付き合っている事などもうあっとい

う間に知れ渡っている状態で、冷やかしを恐れて会話すら出来ません。さらに当時バレーボール部は大会前で金本さんには休日もない為デートもろくに行けませんでした。

段々溜まっていくフラストレーション。せめて僕も忙しかったなら良かったのです。暇が延々と積み重なり、もう爆発寸前でした。そんな時に限って不幸な知らせは届くのでした。金本さんが指の骨を折ってしまいました。大会前のこの時期にです。金本さんは練習試合にも参加出来ずに、ひたすら怪我していても出来る様な軽いトレーニングしか出来ないという状態に陥り、ショックで心ここにあらずの状態が続きました。僕に出来ることはなんだろう。と考えて出た答えは距離を置く事でした。これは金本さん側も同じように考えていた事だったようですが、つまり、今は人生を楽しんでいる場合じゃなく、その楽しい時間を犠牲にしても早くバレーボールの試合に復帰出来るように努力していきたいという金本さんの気持ちがあり、また僕も同じように考え、その事を言い渡したのでした。僕は信じて待ちました。

7月になり、徐々に夏も本格化する頃、席替えがありました。僕は金本さんの左ななめ前という、良席につく事ができました。しかも、窓際で、授業中校庭を眺める事も出来ます。しかし、この席替えが僕の精神をずたずたに引き裂く事になるとは、当時全く気付きもしませんでした。金本さんの前の席になったのはその頃仲良くなり始めた僕の友人であるひろくんでした。ひろくんは身長が金本さんよりも更に低いのですが、バスケットボール部に所属し、ポイントガードという司令塔的ポジションに立っていました。金本さんもバレー部では背が低いほうで、更に金本さんのついているセッターというポジションもまた、司令塔のような役割を持っていて、2人はある意味非常に共感しあえる間柄でした。このように書けば、誰もがこの恋の結末が予想出来るのではないのでしょうか。そうです、この2人は恋に落ちる事になります。僕が必死に我慢をし、金本さんと距離を置いているのに、金本さんはひろくんとメールをしたり、前に僕にやっていたような悪戯のし合いっこを始めたのです。僕は左に窓がある席なので、嫌でも右に顔を向ける事になっていましたので、二人の馴れ合いはどうしても視界に入ってくるのでした。あの時の屈辱は忘れる事が出来ません。友人と恋人のイチャイチャするのを見て、誰が耐えられるでしょう。ついに僕の堪忍袋の緒は切れ、金本さんに怒りをぶつけてしまいました。すると、思った以上に簡単に僕は切り捨てられたのです。その日の夜、金本さんからメールが来ました。「いきなりだけど、別れよう。」たった一言そう書かれていました。その時、僕は友人とランニングをしていて、休憩時間を取って、いままさになんとか興味本位で買ってしまったスパークリングウォーター（すなわち炭酸水）を飲んでいたのでした。スパークリングウォーターは失恋の味。僕の中でそんな言葉が生まれました。

あれから7年が経ちました。僕は1年浪人を経て、有名私大に進学をし、もう大学4年生になりました。大学2年生の頃には、バイト先で出会った女性と恋に落ち、もう高校時代には縁がなかった様なあらゆる全てを体験しました。大学3年生の夏に別れてしまいましたが、未だにバイト先も変わらず、時に喧嘩もしますが、仲良くやっています。こういう恋愛が理想です。今後もうこういう恋愛をしていきたい。

さて、大学四年の夏、就職活動で苦戦していた僕に、高校時代からの友人である耕平から初めての合コンに誘われました。僕はずっと合コンというのはふざけた男女がやるもので、普通はやってはいけない事だと馬鹿みたいに信じていました。ですから、

初めは戸惑い断ろうと思ったのですが、耕平は本当に困っているらしかったので、数合わせとして、参加することにしました。こういいましたが、実際には少し期待していたのかもしれない。就職活動が本当に上手く行ってなかった僕にはきっとこういうイベントにでも参加しないとやっていられなかったのです。

その合コンで僕は紺野香織という不思議な女性に出会いました。

紺野さんは合コン中ずっと浮いていました。酒に弱いらしく、彼女の視点は何もない一点に集中していました。僕以外の参加者にとって紺野さんの評価はイマイチだったそうです。しかし、僕には非常に素晴らしい女性に映ったのです。紺野さんは女子大学（俗にいうお嬢様大学の系統でした。）に通い児童文学を専攻しているらしく、趣味は純文学というから今時珍しい女性だなと思いました。その後、何度か合コンメンバーで遊びましょうといったイベントはあったのですが、そのほぼ全てを彼女は不参加で通しました。てっきり今回の合コンを外れだと考えているのではないかと思いましたが、本人に聞いてみるとそういうわけではないようでした。恐らく僕だけが彼女に執拗にメールをしていたことでしょう。もう周りの参加者は合コンなどなかったといったような様子で関係も薄れていく中、僕だけがアプローチを続け、紺野さんはスノーボードが大好きだという事を知り、スノーボードに一緒に行く事になったのです。僕はそのためにメンバーを集めました。

僕の大学の友人であり、無二の親友である桑野浩二、いろんなイベントを企画し、いつも幹事を努めてくれる社会人5年目のしっかり者川辺弘樹、その川辺と仲が良く、カフェに務めている美女沢谷雪乃、大雑把で男勝り、遠慮のない物言いが特徴だけれど気遣い上手の河野優希、それに紺野香織と僕、萩尾良を合わせた6人でした。

人見知りだという紺野さんのために、僕はまず顔合わせの会合を開くことにしました。しかし、なかなかメンバーの時間が合わず、最初は川辺と紺野さんと僕の三人で会うこととなりました。